

12回連載 エッセイ 第2話 「あやまちすな、心して…」

徒然なるまま



安永暢男（元東海大学教授）

「徒然なるまま」という本コラムのタイトルは本誌編集委員会で決められたとのこと。タイトル通り、書く内容はどんな話題やテーマでも結構、と言われて安請け合いしてしまったのだが、文才に乏しい我身としては、何でも OK と言われると却ってネタが見付からない…などと後悔しながら今回も考え込んでいるうちに、兼好法師の「徒然草」を思い出した。高校時代だったか、古典文学の一つとして勉強しただけなので内容はほとんど覚えていないのだが、一つだけどうかすると思い出す話がある。

「高名の木のぼりといひし男…」(第百九段)の話で、筆者でさえ記憶しているくらいだから、徒然草の中でも良く知られた一節なのだろう。弟子を高い木に登らせて枝を切らせた折に、高所で作業している間はその親方は黙って見ていた。軒丈ほどの低いところへ降りて来た頃になって初めて

「あやまちすな、心して降りよ（油断せず気を付けて下りなさい）」と言葉をかけた。それを傍で見ていた作者が「ここなら飛び降りようと思えば降りられるほどの高さではないか？」と聞くと、親方は「目が回るほど高く、危険なところでは自分で気を付けるので傍から何も言う必要はない、事故は安全と思われるところで必ず起きるものだ」と言ったので、これは聖人の戒めに等しい、と作者は大いに感じ入った、という内容である。作業や操作におけるミスや事故を防ぐための基本のキともいえる心構えを説いたもので、時代を越えて通じる話として大いに教えられたように記憶している。

確かにこの木のぼりの親方の言う通り、日常生活でも仕事の上でも、思わぬ事故を起こしたり怪我をするのは、作業に慣れて気が緩み、油断した頃が一番多いことは、誰でも一つや二つ実体験として記憶に残っているのではなかろうか。

筆者も若い頃、実験中にみっともないヘマをした経験がある。サファイアのメカノケミカル研磨法について研究を進めている過程で、加工変質層の評価のために熱リン酸溶液でサファイア試料をエッチングするという作業を行っていた。具体的には、リン酸溶液を入れたビーカーをガスバーナーで 300℃前後に加熱した中にサファイア試片を浸漬して一定時間エッチングする、という作業で、液温の計測には極く一般的



徒然草の作者 卜部兼好
(菊池容斎画 明治時代)

棒状水銀温度計を使用していた。温度計のガラス表面も僅かずつではあるが熱リン酸液にエッチングされて次第に細って来る。ガラスが溶け過ぎて、万一水銀が漏出すれば非常に危険であることは分かっていたので、初めのうちは慎重に構えて、何回か使用したら新品に交換するというルールを厳守していた。ところがこの作業に慣れて来ると、未だ使えそうだと、もう少し使おう、と次第にギリギリまで同一温度計で間に合わせるようになり、ある時とうとう溶け過ぎたガラス棒から水銀が熱リン酸液中に漏出してしまった。その途端、ビーカーが破裂して熱リン酸液が飛散し、温度計を保持していた右腕に何ヶ所もひどい火傷を負うというお粗末の一件であった。

これはまさに高名の木のぼりの話がそのまま当てはまる事例と言える。即ち、馴れない内は気を付けて恐る恐るマニュアル通りに作業していたので事故を起こすことはなかった。ところが作業に馴れて来るに連れて次第に気が緩み油断した挙句にケアレスミスを行ってしまったということである。

この事故の責任は、第一義的には作業者本人にあることは紛れもない事実であるが、客観的に見るともう一つ大きな問題があって、それは、このような危険を伴う作業が実験作業員一人に任せられ、同僚や他の作業員など他人の目が届かず、組織としてのチェックも働いてなかったということである。「高名の木のぼり…」の話になぞらえれば、「あやまちすな…」と声を掛けるチェック役がいれば十分防げた筈の事故であった。

筆者は、国の研究所（電総研）、民間企業（新日鉄）、私立大学（東海大学）に在籍し、勿論限られた範囲内ではあるが産官学の異なる“文化”を体験した。実験・研究現場

における事故対応策、安全管理・チェック体制という観点で敢えて比較すると、最も安全意識が高く事故防止のための様々な対策を取っているのはやはり企業で、製造現場だけでなく研究開発部門でも数名以上のグループ単位で相互に作業状況を把握し合い、一人作業になるのを避ける体制を整えている。それでも起きるのが事故というもので、ある製造現場で構造物の解体作業中に自分の乗っているプラットフォームの足を自分で切り落としてしまい、転落して死亡するという、監視役が傍に居れば絶対起きる筈のない事故が発生したこともあった。

一方、組織としての安全意識が企業ほど高くなく、「監視の目」も届き難いために、いつ事故が起きてもおかしくない、と心配になるのは大学である。教員一人一人が独立して「一国一城の主」の如くに活動する場合が多く、学科・学部全体として安全管理を徹底し、実験研究現場を教員同士でチェックし合うというような“他人の目”は働き難いように感じた。安全対策に組織的に取り組み始めた大学もあると聞くと、少なくとも実験系の研究室であれば、事故防止の観点から、一人作業はさせない、研究室の学生同士で実験状況を相互に監視しチェックし合う姿勢を徹底させる、という程度の対応は必要ではないだろうか。

先の福島原発のような大規模プラントの重大事故も、“原子力村”と呼ばれる専門家集団の中で醸成された“安全神話”に寄り掛った油断と、部外者の“監視の目”を排除した閉鎖性に遠因があるとも批判されている。徒然草の故事は、規模の大小を問わず現代社会のあらゆる場面に通じる教訓ともいえるであろうが、「教訓」とは事故が起きる前にはなかなか活かされないもののようだ。